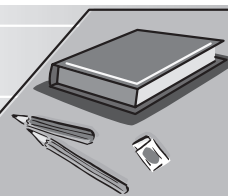


# 学生時代と図書館 79

「-美女とローマの図書館で-」

近藤 直樹



私と図書館との関係には、別段、特別なものはない。中学、高校、大学を通じて、とりわけ試験前の図書館を支配する「喋ってはいけない」緊張感に辟易し、むしろ古本屋に通い、安価で手に入れた本を手し、その足で喫茶店めぐりをしながら書物との関係を築き上げてきた。青春時代にはそうした自分に、若者特有の思い上がりからある種矜持のようなものすらおぼえていた。とはいえ大学院生にもなると、当然ながら「古本屋-喫茶店」ルートにも限界が見えてくる。日本では手に入らないイタリア語の古本など、今ではネットで容易に購入できるが、1990年代当時はそうはいかなかった。いわば必要に迫られて、京都大学文学部閲覧室に、足繁く通うことになる。

ところが習慣とは不思議なもので、あれほど避けてきた図書館が、さほど嫌いではなくなっていた（かといって好きになったわけでもないが）。大学院時代は図書館との関係を築き上げる、リハビリのような時間でもあった。

その後、何とか博士後期課程には進んだものの、修士論文が思うように仕上がらなかったために、何を研究すればいいのか皆目分からなくなり、逃げるようにしてイタリアのナポリ大学に留学する。このイタリアの地で、図書館との濃密な時間が待ち構えていた。といっても、その舞台はナポリではなくローマであり、「濃密」とは言いながらも、一週間という極めて短い「アヴァンチュール」で、それも私自身の研究とは全く関係がない他人の調べ物のお手伝いである。新井白石の『西洋紀聞』に出てくるイタリア人宣教師シドッティのことを調べていた知人に頼まれて、ローマの図書館めぐりをする羽目になったのだ。『西洋紀聞』は好きで読んでいた一冊だったし、行き詰った研究から離れてしばしの知的散歩のつもりで、快く引き受けてしまった。まずはカサナテンセ図書館の門を叩き、司書の方に手伝っていただいて、シドッティ関係の論文

や文献をコピーした。その時には、世の中にこれほど「学術雑誌」というものがあるのだと思い知らされた。ここで知り合ったイタリア人神父の方に、他にシドッティの文書があれば参照したいと漏らしたところ、グレゴリアン大学の教授を紹介していただき、彼からバチカン図書館を勧められた。その際、紹介状をちゃっかり書いてもらったのは、言うまでもない。

そしていよいよバチカン図書館へ。美しい中年イタリア人女性の司書に手伝ってもらいながら、17世紀から18世紀にかけての、日本と関わる宣教師の書簡を集めた冊子にたどり着いた。こちらはカサナテンセ図書館とは違い、書簡の現物を集めた貴重品である。鼻をつく黴臭い匂いと司書の女性の妖艶にして甘い香りに幻惑され、それでも負けじとページを繰る手は汗ばんでいった。ここでは他にも、同時代の神父が書いたシドッティの評伝など、珍しい書物も閲覧し、その多くの複写を手に入れることができた。

帰り際に、その美しい女司書に呼びとめられた。淡い期待とともに振り向いたが、彼女が告げた言葉は、期待していたよりもある意味ではさらに劇的なものであった。「あなたが閲覧した史料はどれも珍しいもので、ほとんど全て、日本人ではあなたが二人目よ。」「それは光栄です。」「それがね、どの本もみな、かつて同じ人が調べているの」。なんと、色々な書物や書簡を参照したつもりだったのだが、その全てにおいて、同じ人に先を越されていたのである。「その人の名前を聞いてもいいですか？」尋ねる私に、彼女はとてもしゃべりくそうに、イタリア語訛りで日本人の名前を告げた。「マツダ・キーチ」。

それから数年後、偉大なる「一人目」が勤務していた大学に、ほぼ二人目である私が働くことになるとは、その時は夢想だにしなかった。

こんどう なおき（准教授・ナポリ文化史）